日本語リテラシー教育と日本語学との関わり
－ 日本語学的知識は日本語表現能力向上に寄与するか －

Japanese Literacy Education and Japanese Linguistics
- The Relationship between Japanese Linguistic Knowledge and Japanese Expression Ability -

野　呂　健　一
Kenichi Noro

（　要　約　）
現在多くの大学で、日本語リテラシー教育、すなわち、大学での学びや日常生活で求められる日本語能力向上を目指す教育が行われている。日本語リテラシー教育を担当しているのは、日本語学や言語学の専門家であることが多いが、日本語を客観的研究対象とする日本語学の知見は、一般には外国人学習者を対象とする日本語教育に資するものと考えられることが多い。本稿では、日本語学の知識が日本語表現能力の向上にも寄与することを、日本語表現科目のテキストの例を挙げながら考察する。

（キーワード）
日本語リテラシー、日本語学、コミュニケーション

１　はじめに

日本人の大学生に対して、読む、書く、話す、などの基礎的スキルの向上を目指す教育（以下、「日本語リテラシー教育」と呼ぶ）を導入する大学が増加している。日本語リテラシー教育の実施状況を全国の国公私立大学に調査した清水・秋山（2010）によると、回答のあった大学のうち半数以上の大学で何らかの日本語リテラシー教育を実施している。また、日本語リテラシー教育を担当しているのは、半数以上の大学で、「日本語学・言語学・日本語教育学」の専門家であるとのことである。

日本語学とは日本語を客観的に捉える学問であり、外国人学習者を主な対象とする日本語教育に資するものと考えられることが多い。しかし、日本語学や言語学の専門家が日本語リテラシー教育を担当する以上、それらの間に何らかの関わりが求められる。本稿では、日本語学・言語学の研究者であり、短期大学において日本語リテラシー教育を担当しているという立場から、日本語学や言語学における知見が、日本語リテラシー教育に対して、どのような点で貢献できるかを考えてみたい。

２　先行研究

日本語学と日本語リテラシー教育との関わりについて考察した研究は少なく、管見の限り、橋本（2009）のみである。橋本（2009）も、両者の具体的な関わりについて述べているわけではないが、日本語リテラシー教育において日本語学が貢献できる可能性について、２つの点を指摘している。１つは、言語事項についての基礎情報の浸透不足を補うという点である。これは、日本語リテラシー教育に携わる教員が多岐にわたっていることによるものである。例えば、表記や敬語等について内閣告示・訓令・審議会答申等の関連法規に記されていることについて、担当教員に浸透していない場合があるため、日

本語学からの情報提供が求められる。また、「話しことば」と「書きことば」の区別といった、ある程度実態として了解事項になっていることがらについても、研究を進め有益な情報として提供することが期待されるとしている。

橋本（2009）が指摘するもう一点は、「規範」「規範意識」の取り扱いに関するものである。従来の日本語学の研究対象の中心は、言語が実際にどのように使用されているかに関するものであり、それをどのように記述するかが日本語学の役割であると考えられることが多かった。そのため、「規範意識をはじめとする社会的存在としての言語意識を取り扱うことに、従来の日本語学は消極的であり、実際扱いにくい存在ではある」（同書:10）が、日本語学の社会への貢献を考えるのであれば、どこかで取り扱う必要が出てくると述べている。

橋本（2009）は主として、日本語リテラシー教育に携わる担当教員へのアプローチにおいて、日本語学からの貢献の可能性を示唆しているが、本稿は、日本語リテラシー教育を受ける学生に対して、日本語学的知識の向上と日本語表現能力との関わりを考察するものである。

３　求められる日本語表現能力

大学生・短大生に求められる日本語表現能力とは、どのようなものであろうか。筆者が授業で用いているテキスト（名古屋大学日本語表現研究会編 2008）の前書きに以下のように書かれている。

> 本書で言う日本語の能力とは、特に文学的あるいは芸術的才能を前提としたものではありません。授業のノートを効率よく取ったり、レポートをきちんと書いたり、メールを出したりといった、日常生活の中で誰もが必要とする能力を伸ばすことを目的としています。（同書: 4）

また、三宅（2002: 19-20）は全国の大学で行われている「日本語表現法」的科目の指導内容が、大学の勉強に必要な能力を育成する学問的指導か、社会行動に必要な能力を育成する社会生活的指導かによって分類できると指摘している。

こうしたことから、大学生・短大生に求められる日本語表現能力とは、ノートテイキングやレポート作成、ゼミ発表といった大学での学びに必要な日本語能力、及びメールや電話応対など社会生活を営むうえで求められる日本語能力であると言える。後者は、学生が就職活動をする際、エントリーシートや履歴書の作成、面接試験の応答などでも必要とされるものである。

大学での学びに必要な日本語能力にしろ、社会生活で求められる日本語能力にしろ、それらが発揮される具体的場面のほとんどは相手の存在を前提としたものである。メールや電話応対はもちろんのこと、レポート作成なども読み手を意識して書くことが求められるからである。したがって、言葉はコミュニケーションの手段であるという観点から、日本語表現能力を考える必要がある。美しく正しい日本語を書いたり話したりすることよりも、相手に自分の意図が誤解されずに伝わるような日本語を運用することが優先して考えられるべきである。

橋本他（2006: 23）によると、コミュニケーションは、①参加者、②メッセージ、③記号化、④チャ

ンネル、⑤記号解読、⑥フィードバックの6つの要素から構成される。口頭によるコミュニケーションの場合、話し手が自分の考えを言葉（メッセージ）に記号化し、そのメッセージが経路（チャンネル）を通って聞き手の元に達すると、聞き手がメッセージを解読し何らかの反応（フィードバック）を話し手に対して行うという流れである。

このようなコミュニケーションの流れの中で、話し手が言葉に託した意味と、聞き手が解読した意味とが異なる場合、誤解が生じることになる。コミュニケーションにおいて誤解が生じる要因としては様々なものが考えられるが、次章以降で2つのケースに焦点を当て、日本語学的知識を向上することによって、そのようなコミュニケーション上の誤解を生む危険性を軽減することができることを指摘する。

４　曖昧表現

前章で述べたコミュニケーション上の誤解を生む表現の一つに曖昧表現というものがある。例えば、次の(1)を見てみよう。この文の解釈として、彼が大会に選手として参加し、競技中に骨を折った、すなわち骨折したという場合と、彼が大会に役員か何かで携わり、その運営に尽力したという場合が考えられよう。後者の場合、「骨を折る」が慣用句として用いられている。後者の解釈を意図して発言された(1)を聞いた人が、前者のように解釈した場合、誤解が生じるのである。

（1）彼は昨日の大会で骨を折ったらしいよ[1]。

文の曖昧性をもたらす主な要因として、西山（2011）は、以下の5つを挙げている。以下で、dの「特殊な構文の曖昧性」を除く4つについて、日本語における例を挙げ、日本語リテラシー教育との関わりを見ていく。

（2）a. 文を構成している構成要素の曖昧性
　　b. 統語構造上の曖昧性
　　c. 否定詞や数量詞の作用域の違い
　　d. 特殊な構文の曖昧性
　　e. 名詞句の意味機能上の曖昧性

aの「文を構成している構成要素の曖昧性」とは、語や句の曖昧性が文全体の曖昧性の原因となっている場合を指す。西山（2011）は、日本語の例をして(3)を挙げている。「つぶれる」には①〈倒壊する〉、②〈倒産する〉の意味があり曖昧であるため、それに応じて文全体も曖昧になっている。

（3）あの会社はつぶれた。(同書: 139)

前述した(1)は、慣用句の意味と文字通りの意味で曖昧になっており、「骨を折る」という句が持つ曖

味性が文全体の曖昧性の原因となっている。

また、教科書を忘れた学生が教員に対して以下のような発言をした場合、学生は「(教科書を) 今日は持って来なかった」という意図であったのに対し、教員は「(教科書を) まだ入手していない」と解釈したため、コミュニケーションがうまくいかない可能性がある。

（4）（教科書を）持っていません。

国語辞典における「持つ」の意味記述を確認すると以下のようになる[2]。すなわち、「持つ」という語は複数の意味を有する多義語であると言え、学生が②の意味で発話したのに対し、教員は③の意味で解釈したことになる。

（5）①手にとる。手の中ににぎる。「重たい荷物を―・つ」「右手にペンを―・つ」

②身につける。たずさえる。携帯する。「財布を―・たないで出かける」「いつもハンカチを二枚―・っている」

③所有している。また、自分のものにする。「別荘を―・つ」「栄養士の資格を―・つ」「所帯を―・つ」

(以下省略)

このように構成要素の曖昧性が文全体の曖昧性を生むケースについて、名古屋大学日本語表現研究会編 (2008) では、以下のような例を曖昧にならないように書きなおす問題として挙げている。(6)は「手術をしている」が「(医者として) 手術を行っている」と「(患者として) 手術を受けている」の間で曖昧であり、(7)は「～られる」が可能と尊敬の 2 通りの解釈が考えられる[3]。

（6）一郎は今手術をしている。

（7）あなたはその試験を受けられますか

多義性というのは日本語学・言語学において、現在も様々な研究が進められている分野である。一般的に基本語であるほど、いくつもの意味を持つ多義語であることが多いが、多義であることが気づかれていないものが多い。したがって、学生に対して、それぞれの語や句が多義である可能性を示唆し、気づかせるような指導を行うことが必要であろう。

次にｂの「統語構造上の曖昧性」とは、文の統語構造が文の意味の決定に寄与するケースを指す。西山 (2011) は、(8)の例を挙げて説明している。「自転車で」が「逃げた」を修飾するのか「追いかけた」を修飾するのかによって異なる意味になるのであるが、それは、(8)が(9)a と(9)b という 2 通りの構造を持つことによるものである。

（8）太郎は自転車で逃げた泥棒を追いかけた。（同書: 152）

（9）a. 太郎は［自転車で逃げた泥棒を］追いかけた。（同書: 152）

b. 太郎は自転車で［逃げた泥棒を］追いかけた。（同書: 152）

このような文の統語構造の違いが曖昧性を生むケースについて、名古屋大学日本語表現研究会編（2008）では、以下の例を挙げている。いずれの場合も、2通りの解釈が可能であり、授業では1通りの解釈しかできないようにするにはどうすればよいかを学生に考えさせている。学生に、このような曖昧性を理解させるには、修飾語が修飾する範囲の違い（(10)において「しっぽの長い」が修飾する範囲）や格助詞の意味の違い（(11)の「と」）などの統語論的知識の理解が必要となる。

(10) しっぽの長い犬と猫がいる。

(11) 私は伊藤さんと鈴木さんの家を訪ねた。

(12) 先生と生徒三人が風邪で休んでいる。

(13) 彼と同じくらいその人が好きです。

(14) 次郎が好きな女の子があそこに立っている。

(15) 高橋さんと田中さんの妹が大学時代に友達だった[4]。

続いて、c の「否定辞や数量詞の作用域の違い」について確認する。西山（2011）が挙げる(16)の例は、否定辞「ない」の力が及ぶ範囲の違いにより、(17)の2つの解釈が可能となる。

(16) 太郎は三台の車にペンキを塗らなかった。（同書: 154）

(17) a. 太郎がペンキを塗った車が三台に満たない。（同書: 154）

b. 太郎がペンキを塗らなかった車は三台ある。（同書: 154）

次に以下の例を見てみよう。

(18) 無いものは無い。

(19) 無いことは無い。

(18)が曖昧文であることはよく知られているだろう。すなわち、何でも有るという意味と、無いことを強調する意味である。ここでの「無い」は物事の存在を否定する形容詞である。すなわち、存在を表す「有る」を否定する言葉である。何でも有るという意味の場合、〈無いものが有る〉という事態全体を「無い」が否定するのに対し、無いことを強調する場合、2つ目の「無い」が否定するのは、〈無いものが有る〉全体ではなく、〈有る〉のみである。すなわち、「面白いものは面白い」「いいものはいい」などと同様にトートロジー的な解釈が行われる。

同様に(19)も曖昧文であると言える（(18)ほどは意識されにくいが）。１つは、〈無いことが有る〉という事態全体を否定するものであり、「必ず有る」という意味になる。もう１つの意味を考えるうえに、以下の文が参考になる。

(20) 甘いものは好きなことは好きだが、毎日食べたいほどではない。
(21) 早起きしたことはしたんですが、準備に手間取って遅くなってしまった。

このような例について、筆者は野呂（2010）で、(22)のように形式と意味を記述している。つまり、(19)の２つ目の意味は、「無い」ということは確かであることを譲歩して認める表現である。

(22) 「（S は）P ことはP」（P は、名詞＋だ、形容詞、動詞）：
＜（S は）周辺的な事例であるが、P であることは確かである＞

このような(19)の２つの意味を例文に即して見てみよう。(23)は１つ目の意味であり、「金が無いこと」を否定する表現であるのに対し、(24)は２つ目の意味であり、「金が無いこと」を認める表現となる。

(23) あいつに金が無いことは無い。必ず持っているはずだ。
(24) 金が無いことは無いが何とかやっていける。

以下は、名古屋大学日本語表現研究会編（2008）に掲載されている例である。(25)は、「ない」が「敵である」だけを否定する場合、すなわち、「君だけが味方だ」という場合と、「ない」が「君だけが敵である」全体を否定する場合、すなわち、「君以外にも敵がいる」という場合の２通りの解釈ができる。(26)は、前述した統語構造上の曖昧性であるとも言えるが、「どんな」という数量詞（集合の全てを指す「全称数量詞」）が「男」までを含むか、「男の子」までを含むかによって異なる解釈となる。(27)は(25)と同様に、「ない」の作用域の違いが問題となり、「星野君のように」が否定される範囲に含まれるかどうかで解釈が異なる。

(25) 君だけが敵ではない。
(26) どんな男の子でもよい。
(27) 落合君は星野君のようにまわりの評価に左右されない人だ。

最後に、「名詞句の意味機能上の曖昧性」について確認する。以下は西山（2011）が挙げる例である。(28)は、花子の指導教授の容貌や性格が変わったという解釈と花子の指導教授がＡ先生からＢ先生に替わったという解釈が可能である。(29)は、太郎が犯人Ａと面識があるという解釈のほか、誰が犯人であるかを知っているという解釈ができる。いずれもそのような複数の解釈を生むのは下線で示した名詞句

の意味機能の違いである[5]。

(28) 花子の指導教授が変わった。(同書: 172)
(29) 太郎は、犯人を知っている。(同書: 173)

野呂（2012）では、以下の例が2通りの解釈を生むことを指摘している。すなわち、佐藤君と鈴木君が互いに友人関係にあるという解釈と、2人がいずれも私の友達であるという解釈である。

(30) 佐藤君と鈴木君は友達だ。

野呂（2012）は(30)における曖昧性を、「友達」関係の対称性という観点から説明しており、同様に2通りの解釈を生む、以下の例を挙げている[6]。

(31) 前の職場にいた先輩と同僚が結婚することになったと聞いた。
(32) 「有権者の多くは格差と政治は無関係だと考えているのではないか」

名古屋大学日本語表現研究会編（2008）にも同様の例が挙げられている。一通りの解釈しか許さないようにするためには、「同じ部署の課長と係長が、それぞれ相手を見つけて結婚した」「同じ部署の課長と係長が社内結婚した」のように書く必要があるとしている。

(33) 同じ部署の課長と係長が結婚した。

本章では、西山（2011）を参考に、筆者のこれまでの研究からの紹介を交え、曖昧文が生じる要因ごとに取り上げてきた。このような曖昧文を用いることによって、コミュニケーション上の誤解が生じる場合、話し手（書き手）は、その表現が曖昧であることに気づいていないのである。日本語リテラシー教育において求められるのは、本章で挙げた曖昧性の要因となる様々な現象について学生に気づかせ理解させることであるが、それに加えて、自らの言語活動を客観的に捉える視点を身につけること、つまり、自分が発した文（書いた文）が自分の意図の通りに相手に伝わるかどうかを、他者の視点に立って振り返ることが求められる。

5　知識不足による誤解

ここでは、日本語に関する知識不足によって誤解が生じるケースについて述べる。次の(34)は、本来「遠慮したり気を使ったりする必要がない人」であることを述べる文であるが、最近では、本来の意味とは異なる意味で使う人が多い[7]。したがって、話し手と聞き手が異なる理解をしている場合、誤解を招くことになる。しかも、「気が置けない」の場合、本来の意味と誤った意味がほとんど正反対である

ため、誤解が深刻なものになる可能性がある。話し手が本来の意味で話題の人物のことを評したのに、聞き手が異なる解釈をしたため、話し手の意図とは反対の対応をしてしまうかもしれないということである。

(34) あの人は気が置けない人だ。

このように最近本来の意味とは異なる意味で使われることが多い言葉について、文化庁が「国語に関する世論調査」の中で調査を行っている[8]。これまでに本調査の中で報告された慣用句の中から、誤解が深刻なものになりやすいものをいくつか選び、高田短期大学の学生に対して意識調査を行った[9]。その結果を表1に示す。

「国語に関する世論調査」と同様の結果、すなわち、本来の意味とは異なる意味で使う人の方が多いという結果が出たものは、上に挙げた「気が置けない」のほか、「手をこまねく」「敷居が高い」「世間ずれ」「ぞっとしない」であった[10]。この中でも、(35)に挙げる「手をこまねく」は「何もせず傍観する」という本来の意味に対して、「準備をして待ち構える」という異なる意味が、ほとんど反対の関係になっており、誤解が生じた場合の影響が大きいであろう。それに対して、(36)に挙げる「敷居が高い」は、どちらの意味にしても話題の場所に行きにくいのであるため、誤解が生じたとしても大きな問題にならないではないかと思われる。

(35) 手をこまねいて待っていた。
(36) あそこは敷居が高い。
(37) 彼は世間ずれしているから、この仕事には合わないだろう。
(38) 今の映画は、余りぞっとしないものだった

本来の意味と異なる意味で用いられることによって誤解が生じるものについては、特に誤解による影響の大きいものを中心に本来の意味を指導する必要がある。その際、その語句だけを取り上げて正しい意味を指摘しても効果は薄いであろう。例えば(39)のように、実際に用いられる文脈の中で指摘し、誤解が生じることによってどのようなことが生じるのかを考えさせるべきである。

(39) A：○○学科の田中さんって知ってる？
B：知ってるよ。気が置けない人だよね。
A：へえ、そうなんだ。

表１　慣用句の意味に関する意識調査（文化庁「国語に関する世論調査」と高田短期大学学生との比較）

慣用句	（上段）本来の意味 （下段）誤った意味	国語に関する 世論調査	高田短期大学 学生
気が置けない	相手に気配りや遠慮をしなくてよい	42.4％	10.3％
	相手に気配りや遠慮をしなくてはならない	48.2％	51.3％
手をこまねく	何もせず傍観する	40.1％	10.3％
	準備をして待ち構える	45.6％	30.8％
役不足	本人の力量に対して役目が軽すぎる	40.3％	38.5％
	本人の力量に対して役目が重すぎる	50.3％	35.9％
御の字	大いにありがたい	38.5％	35.9％
	一応納得できる	51.4％	3.6％
敷居が高い	相手に不義理などをしてしまい、行きにくい	42.1％	5.1％
	高級すぎたり上品すぎたりして入りにくい	45.6％	71.8％
枯れ木も山のにぎわい	つまらないものでも無いよりはまし	35.5％	35.9％
	人が集まればにぎやかになる	38.6％	23.1％
世間ずれ	世間を渡ってきてずる賢くなっている	51.4％	2.6％
	世の中の考えから外れている	32.4％	43.6％
ぞっとしない	面白くない	31.3％	12.8％
	ぞっとしない	54.1％	35.9％

６　まとめ

本稿では、日本語リテラシー教育と日本語学との関わりについて、学生の日本語表現能力の向上という観点から考察を試みた。大学生・短期大学生に求められる日本語表現能力とは、文学的あるいは芸術的に優れた文章を書くことではなく、大学での学びや日常生活及び卒業後の社会人生活において、自分の意図を相手に誤解されることなく伝えることである。

コミュニケーションにおいて誤解が生じるケースについて、表現の曖昧性による誤解と知識不足による誤解の２つを取り上げ、日本語の例を挙げながら、日本語学的知識の向上によって、誤解の危険性を軽減できることを示した。

日本語学の様々な分野の中から、本稿では、語彙論、統語論及び意味論的知識の向上が日本語表現能力の向上に寄与することを示した。そのほか、口頭コミュニケーションにおいて自分の考えを誤解なく相手に伝えるには、音声学・音韻学の知識による貢献が大きいと思われる。今後、本稿で取り上げることができなかった分野との関わりについても考察が望まれる。

註

1　「ずいぶん」などの副詞を伴えば意味が限定される。

2　『デジタル大辞泉』小学館

3　「～られる」には受け身の用法もあるため、3通りの意味の間で曖昧になることもある。

4　この例は、「高橋さんと田中さんの妹」の部分の構造上の曖昧性のほか、後述する「AとBが友達だ」という構文における「友達」の解釈の曖昧があり、併せて4つの解釈が可能となる。

5　詳細は西山（2011）及び西山（2003）を参照されたい。

6　(31)は(33)と同様、両者が互いに結婚したという解釈と、両者がそれぞれ別の相手と結婚したという解釈がある。(32)は文脈から判断すると、「格差」と「政治」が互いに無関係という意味であるが、文脈の支えがなければ、「格差」と「政治」が自分（有権者）とは無関係であるという解釈も可能である。

7　表１で示すように、平成18年度「国語に関する世論調査」（文化庁発表）によると、「気が置けない」を本来の意味である「相手に気配りや遠慮をしなくてよいこと」で使う人が42.4%、間違った意味「相手に気配りや遠慮をしなくてはならないこと」で使う人が48.2%である。「気が置けない」に含まれる否定辞「ない」があることにより、句全体が否定のニュアンスを帯びるものとして認識されることが原因であると推察される。

8　国語施策の参考とするため、平成７年度から毎年実施しているが。

9　平成24年11月9日、高田短期大学オフィス人材育成学科「国語表現法」受講学生に対して無記名で実施。回答数39名。

10　「役不足」「御の字」「枯れ木も山のにぎわい」の３つについては、「国語に関する世論調査」と異なる結果が出ている。いずれも高田短期大学の学生の中では本来の意味で理解している学生の方が多いという結果であった。「役不足」については、「気が置けない」等と同様、本来の意味と間違って用いられる意味が正反対であるため誤解による影響が大きい

①彼には役不足の仕事だ。

②70点取れれば御の字だ。

③何のお役にも立ちませんが、枯れ木も山のにぎわいでやってきました。

引用文献

清水史・秋山英治（2010）「高等教育における日本語リテラシー教育の現状と課題」，『愛媛大学法文学部論集人文学科編』28号，pp. 83-116.

名古屋大学日本語表現研究会編（2008）『書き込み式日本語表現ノート』，三弥井書店.

西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』，ひつじ書房.

西山佑司（2011）「曖昧表現からことばの科学を垣間見る」，大津由紀雄編『ことばワークショップ－言語を再発見する－』開拓者，pp.135-180.

野呂健一（2010）『現代日本語の反復構文―構文文法と類像性の観点から―』，名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文.

野呂健一（2012）「「AとBは友達だ」の解釈について―対称性の観点から」，『日本認知言語学会論文集』11巻，pp.363-373.

橋本修（2009）「日本語学と日本語リテラシー教育」『日本語学』28巻2号，pp.4-12.

橋本満弘・畠山均・丸山真純（2006）『教養としてのコミュニケーション』，北樹出版.

文化庁「国語に関する世論調査」，http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/index.html

三宅和子（2002）「「日本語表現能力を育てる」とは―大学生の日本語表現能力をめぐる問題と教育の方向性―」，『文学論藻』76 号，東洋大学，pp. 18-32.